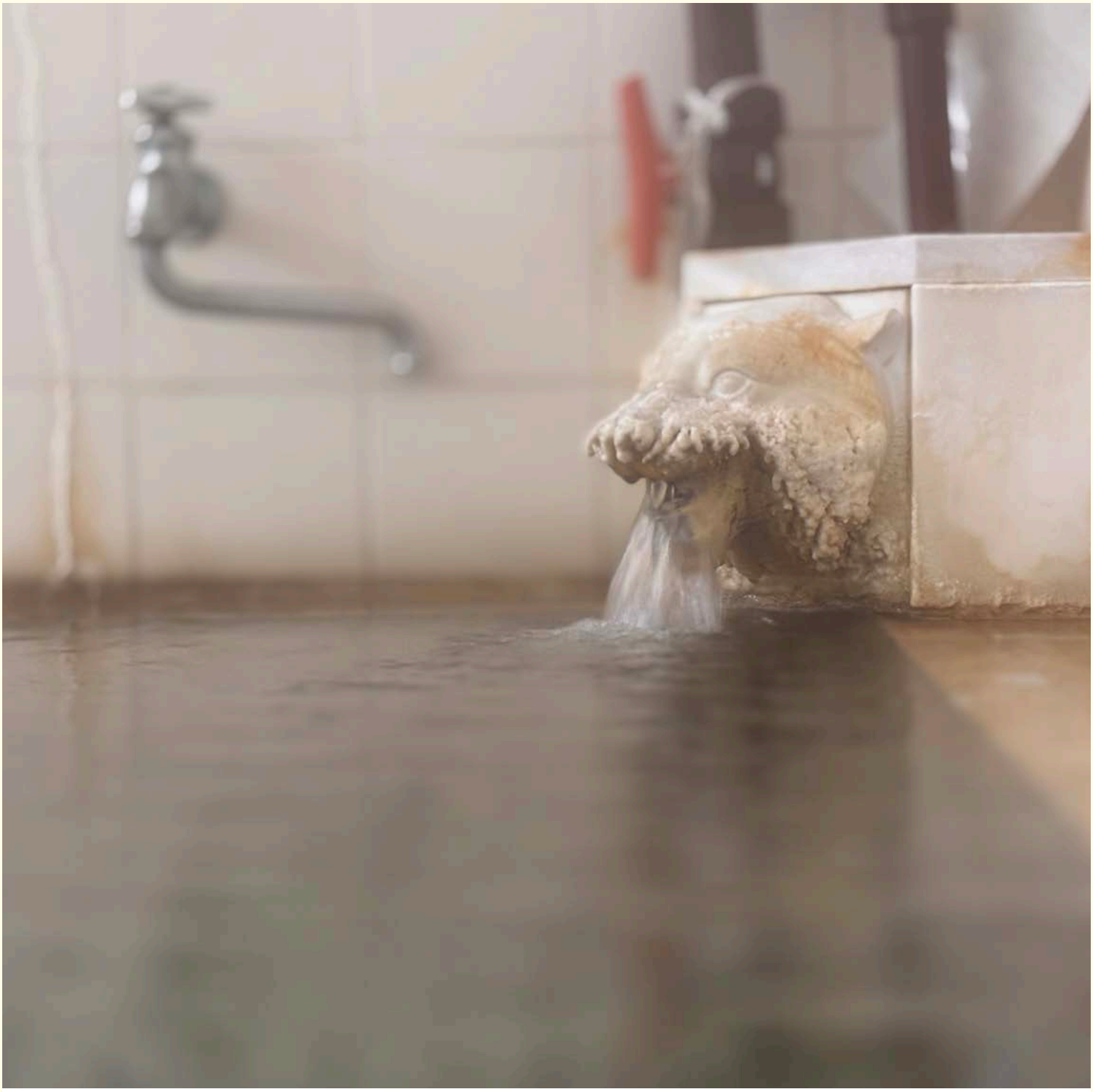
学内広報

2026.3.25 no.1604



樹芸研究所・下賀茂寮宿泊施設（大浴場）の吐水口

ゼミ合宿など
でも使えます！

→p.4

長らくありがとうございました
令和7年度 **退職教員アルバム**

南伊豆に東大温泉♨あり！
～樹芸研究所・下賀茂寮宿泊施設とは？

信長自筆書状や秀吉の新発見誓約状を茨城で公開
進展する史料編纂所の地域協創

UTokyo 150

令和7年度

退職教員アルバム

先生方の詳しい情報はこちらから →

法学政治学研究科
田邊國昭 教授

政策学
昭和59年4月～

法学政治学研究科
新田一郎 教授

日本法制史
昭和63年4月～

法学政治学研究科
Simon VANDE WALLE 教授

競争法
令和元年9月～

医学系研究科
岡部繁男 教授

神経細胞生物学
昭和63年9月～※

医学系研究科
高橋尚人 教授

新生児医学
平成24年3月～※

工学系研究科
大久保達也 教授

化学工学
平成3年3月～

工学系研究科
高橋浩之 教授

放射線計測学
昭和64年1月～

工学系研究科
千葉 学 教授

建築意匠
平成5年4月～

工学系研究科
中須賀真一 教授

宇宙工学
平成2年4月～

工学系研究科
森田一樹 教授

金属生産工学
昭和63年4月～

人文社会系研究科
大津 透 教授

日本古代史
平成9年4月～

人文社会系研究科
大西克也 教授

中国語学
平成7年4月～

人文社会系研究科
大宮勘一郎 教授

ドイツ語ドイツ文学
平成23年4月～

人文社会系研究科
唐沢かおり 教授

社会心理学
平成18年10月～

人文社会系研究科
後藤和彦 教授

英語英米文学
平成29年4月～

人文社会系研究科
高木和子 教授

日本文学
平成25年4月～

人文社会系研究科
橋場 弦 教授

古代ギリシア史
平成18年4月～

人文社会系研究科
堀内秀樹 教授

考古学
昭和59年4月～

理学系研究科
狩野彰宏 教授

堆積学
平成28年12月～

理学系研究科
久保健雄 教授

動物生理化学
昭和62年11月～

理学系研究科
茂山俊和 教授

超新星爆発
平成4年1月～

理学系研究科
杉山宗隆 教授

植物生理学
平成8年3月～

理学系研究科
長谷川修司 教授

物性物理学実験
平成2年3月～

理学系研究科
松尾 泰 教授

素粒子理論
平成4年1月～※

農学生命科学研究科
宮下 直 教授

生態学
昭和60年4月～

経済学研究科
大日方 隆 教授

財務会計
平成10年4月～

経済学研究科
福田慎一 教授

マクロ経済学
平成8年4月～

経済学研究科
星 岳雄 教授

マクロ経済学
令和元年9月～

経済学研究科
松島 斉 教授

ゲーム理論
平成6年4月～

総合文化研究科
池上高志 教授

人工生命
平成6年3月～

お疲れ様でした&ありがとうございました

年度末に退職する教員情報について全学に提供を呼びかけ、
所属部局から提出があったものから、皆さんのお写真を抽出して掲載します。
長年にわたる研究・教育活動、大変お疲れ様でした。

＝凡例＝
1 所属部局
2 氏名　3 職名
4 顔写真
5 専門分野
行に収まらない場合は省略して掲載
6 在職期間
中断がある場合は※を付記

総合文化研究科
石田 淳 教授

国際政治学
平成 14 年 4 月～

総合文化研究科
宇佐美 洋 教授

言語教育
平成 27 年 4 月～

総合文化研究科
太田邦史 教授

合成生物学
平成 19 年 4 月～

総合文化研究科
河合祥一郎 教授

シェイクスピア
平成 6 年 4 月～

総合文化研究科
倉田博史 教授

統計学
平成 12 年 4 月～

総合文化研究科
瀬川浩司 教授

光化学
平成 7 年 4 月～

総合文化研究科
谷垣真理子 教授

現代香港論
平成 10 年 4 月～

総合文化研究科
福井尚志 教授

整形外科学
平成 23 年 1 月～

総合文化研究科
簑口友紀 助教

物性理論
平成元年 4 月～

総合文化研究科
山口 泰 教授

視覚メディア処理
平成 5 年 10 月～

教育学研究科
小国喜弘 教授

日本教育史
平成 23 年 4 月～

教育学研究科
山本義春 教授

生体信号処理
平成 5 年 4 月～

薬学系研究科
阿部郁朗 教授

天然物化学
平成 21 年 5 月～

新領域創成科学研究科
浅井 潔 教授

情報生命科学
平成 15 年 4 月～

新領域創成科学研究科
大崎博之 教授

超電導工学
昭和 63 年 4 月～

新領域創成科学研究科
岡本 博 教授

物性物理学
平成 10 年 4 月～

新領域創成科学研究科
森下真一 教授

ゲノム科学
平成 9 年 9 月～

情報学環
石崎雅人 教授

コミュニケーション
平成 15 年 4 月～

医科学研究所
藤堂具紀 教授

悪性脳腫瘍治療
平成 15 年 1 月～

医科学研究所
中西 真 教授

分子老化学
平成 28 年 4 月～

地震研究所
金子隆之 准教授

火山学
平成 4 年 4 月～

東洋文化研究所
園田茂人 教授

社会学
平成 21 年 4 月～

生産技術研究所
平本俊郎 教授

集積デバイス
平成 6 年 4 月～

史料編纂所
小宮木代良 教授

日本近世史
昭和 61 年 4 月～

史料編纂所
本郷恵子 教授

日本中世史
昭和 62 年 4 月～

宇宙線研究所
川崎雅裕 教授

宇宙論
平成 5 年 4 月～

物性研究所
常次宏一 教授

物性物理学
平成 18 年 9 月～

物性研究所
廣井善二 教授

固体物性化学
平成 10 年 12 月～

物性研究所
森 初果 教授

物性科学
平成 13 年 9 月～

総合研究博物館
西秋良宏 教授

先史考古学
平成 8 年 4 月～

南伊豆に源泉掛け流しの 東大温泉♨あり!

下賀茂寮の大浴場で一日の疲れを癒す全学体験ゼミの学生さん

熱帯植物と体験学習の拠点 樹芸研究所・下賀茂寮宿泊施設

伊豆半島の最南端、静かな山あいに湧き出す温泉が、学びの場を支えてきました。自然の恵みを活かし、温室の熱帯植物やフィールド実習、下賀茂寮宿泊施設（以下、下賀茂寮）を通して、学生が自然と向き合う力を育む拠点が、樹芸研究所。所長の齋藤暖生先生に、研究所の役割、温泉が開く教育の可能性、南伊豆とともに紡ぐ新たな展望について聞きました。

カカオにバニラにマンゴーまで

“南伊豆は東京からの移動に時間がかかり、公共交通機関だけでは辿り着くことも難しい場所です。気軽に訪ねられる立地ではありませんが、温暖な気候が育む熱帯・亜熱帯植物、海と森に包まれた静けさ、そして東大でおそらく唯一の源泉かけ流し温泉と、ここに来なければ触れられない学びと体験が確かに存在します。

樹芸研究所では、カカオ、バニラ、コショウ、ターメリック、マンゴー、パラゴムノキ、ビャクダンなど、約200種の植物を育てています。食用植物や油糧植物を通じて食文化や歴史、環境問題へと議論が広がり、植物と人間社会の関係を学びながら失われつつある自然とのつながりを考え直す場として、大きな役割を果たしています。

1948年に掘削された源泉は、100%かけ流しの食塩泉です。温室の熱源として植物の生育を支え、下賀茂寮では学生たちが朝風呂を楽しみ、生活のリズムを整える場にもなっています。さらに温泉は自然エネルギーの活用を学ぶ教材にもなり、新たな研究の芽を育てています。2020年から樹芸研究所が管理するようになった下賀茂寮は、部屋数10の活動拠点です。初対面の学生でも寝食を共にすることで打ち解け、夜遅くまで議論が続くことも。南伊豆という環境、自然、温泉が、深い対話と自由な発想を生む土壌になっています。

目の前の植物がカレーに！

全学体験ゼミ「伊豆に学ぶ自然の恵みを活かす技」では、薪割りや炭焼きなど、自然と暮らしをつなぐ体験をします。自ら割った竹を器に仕立て、研究所産のスパイスを使って作るカレーを盛り付けて味わう時間は、自然の恵みを“生活の技”として感じる象徴的なひとときです。さらに、タピオカの原料であるキャッサバのでんぷんで皮を作る桜餅づくりなど、植物が生活文化を支えてきた歴史にも触れます。「植物を通じて日常と世界の環境がつながった」と語る学生も多く、体験が知を深める確かな手触りとなっています。

近年は、猟師の営みを体験しながら、自然と人について考える講義も始まりました。

樹芸研究所長
齋藤暖生

学生が動物の痕跡を読み取って、猟師が模擬狩猟を行うプログラムは、道なき道を進みながら自然と向き合う実践の場。また、2018年に締結した南伊豆町と農学生命科学研究科との連携協定に基づき、GX（グリーントランスフォーメーション）を目指して温泉熱を使った親子向けチョコづくり講座など、多様な協働が進んでいます。保護者との対話から新たなアイデアが生まれることもあり、地域と大学がともに未来を描く場としての手応えがあります。

リトリートを兼ねた合宿や研究会にも最適な場所です。南伊豆で過ごす時間は、専門の枠を越えた対話や新しい着想を生むきっかけになるはず。樹芸研究所と下賀茂寮を、教育・研究・交流のフィールドとして学内の皆さんに活用いただければ幸いです。”

❶❷保健体育寮だった下賀茂寮（1967年設置）の建物が、2020年に農学生命科学研究科に移管されました。❸1948年に掘り当てられた源泉を熱源とする温室（2009年改築）。❹温室で育てたカカオ（トリニタリオ種）。❺南伊豆町との協定事業で2月14日に実施した「温泉とカカオ豆から作るチョコレート体験」。9組21名の親子が参加してくれました。❻狩猟体験を中心とした全学体験ゼミ（2月）。猟師さん5名の指導を受けながら学生たちが痕跡調査を行い、イノシシを捕獲することができました。

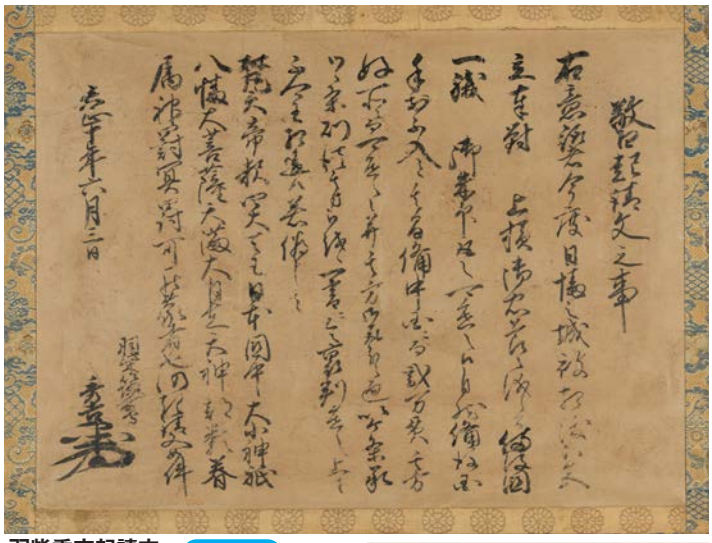
※下賀茂寮は今後老朽化対応の工事が入る可能性があります。ご利用前に最新情報をお問い合わせください。https://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/jyugei/

進展する史料編纂所の地域協創

茨城県立歴史館との共催展を初開催

信長自筆書状や秀吉の新発見誓約状を初公開

2月7日から3月22日まで、茨城県立歴史館で開催された企画展「史料を集め、伝え、そして編む——東京大学史料編纂所の過去と現在」。2025年に編纂所に新設された史料学協創センター開設を記念した展覧会です。史料編纂所が外部機関と共催で所蔵品を展示するのは25年ぶりのこと。国宝、重要文化財を含む約80点が一同に展示された企画展について紹介します。



羽柴秀吉起請文　初公開！

（左）茨城県立歴史館で開催された企画展に連日多くの人が訪れました。（右）金子拓教授の講演会には約170人が参加。

織田信長自筆書状（益田家文書）表　初公開！

江戸大地震之図（国宝）

↓史料を紐解き永くつながる歴史を編む史料編纂所の基幹事業をイメージしたロゴ。
https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/

中院一品記（光厳上皇自筆書状）

本能寺の変の翌日の秀吉書状

史料編纂所と地域の博物館や文書館との連携強化の第1弾として開催された今回の企画展。編纂所が所蔵する膨大な史料の中から、国宝「**島津家文書**」をはじめ、代表的な古文書や絵巻、茨城ゆかりの史料などが水戸の茨城県立歴史館で公開されました。

なかでも大きな注目を集めたのが、初公開の「**羽柴秀吉起請文**」です。織田信長の命を受けて備中国高松城（岡山県岡山市）で毛利氏と戦っていた秀吉が、寝返った毛利方の武将に報奨を約束した誓約状で、日付は天正10年（1582）6月3日。信長が明智光秀に討たれた「本能寺の変」の翌日にあたり、秀吉がまだ信長の死を知らない時点で書かれたことが分かる極めて貴重な史料です。昨年10月に史料編纂所の村井祐樹准教授がネットオークションで発見し、筆跡などの鑑定を経て本物と判断されました。

同じく初公開の「**織田信長自筆書状**」は、天正6年（1578）に、信長が重臣の荒木村重に向けて、叛意の噂の真偽を問いただそうと書いたもの。墨が乾かないうちに巻かれたため、裏面に墨が移った痕跡が確認でき、信長の苛立ちなどがうかがえる史料です。このほか、安政2年（1855）の江戸地震前後の様子を描いた絵巻「**江戸大地震之図**」、重要文化財「**光厳上皇自筆書状**」など、史料編纂所の貴重な史料が並びました。

会場には史料学協創センターの新たな試みを紹介するコーナーも。その関連で展示されたのが、室町時代に描かれた「**洛中洛外図屏風**」の復元模写です。原本の科学調査結果を踏まえ、当時と同じ材料や道具を可能な限り用いて、原本の色彩を再現したもの。原本の上に紙を置き、筆勢や墨のにじみまで忠実に映し取る「影写」技術の紹介展示もありました。「織田信長自筆書状」を影写した宮﨑肇特任研究員は、「随分とすり減った筆が使われている」と話し、その再現のために毛先を切り、サンドペーパーで傷ませた筆を使ったと説明しました。

信長の印象を変える「絹衣相論」

会期中には史料編纂所教員による講演も行われました。2月22日に開催された金子拓教授の講演では、常陸国の天台宗と真言宗の僧侶が「絹衣（けんえ）」という法服の着用をめぐって争い、やがて朝廷、さらには織田信長を巻き込む大問題に発展した「絹衣相論」について、展示史料とともに解説しました。信長は、朝廷が天台優位・真言優位と判断を揺らし続ける状況に危機感を抱き、合議による体制整備を求めたのではないかと説明。従来は、信長が朝廷を支配しようとして介入したとする見方が一般的でしたが、近年の研究では、むしろ協力関係にあったという見解もあり、絹衣相論は信長像を再考するうえで重要な事例だと話しました。

地域の博物館や文書館との連携は今後も継続予定で、第2弾として沖縄県立博物館・美術館との企画展も計画されています。

教養教育の現場から

リベラル・アーツの風

第74回

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

フェミニズムと自然科学はいかに関連づけられるのか？

／D&I科目「フェミニズム科学論」

教養教育高度化機構
D&I部門
文／飯田麻結

科学は身体をどう意味づけるか

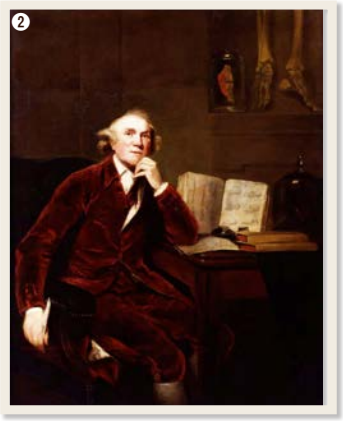
今回は、私が2023年度から担当しているD&I科目「フェミニズム科学論」について主にご紹介したいと思います。この授業で最初に取り上げるのは、フェミニズムと自然科学はどのように関連づけられるのかという問いです。この問いを考えるにあたっては、「フェミニズムとは何か」だけでなく「科学とは何か」という視点が重要になってきます。いわゆるSTEM分野に女子学生が少ないことや、女性の生の向上やエンパワメントを目指す「フェムテック」と呼ばれるテクノロジーを思い浮かべる人も多いかもしれません。けれども、ひとつの知のあり方としての自然科学はどのように「客観性」「普遍性」を担保してきたのか、そして私たちの身体をどのように意味づけてきたのか、一歩踏み込んだ問いを考えるきっかけを授業を通じて提供したいと思っています。

この授業の特色のひとつは、各回で扱う内容が必ずしも時系列ではなく、特定のトピックをめぐる議論を幅広く参照する点です。授業の終わりに提出するリアクションペーパーには質問を書いてもらい、それらに基づいて次回の授業構成を考えるため、過去3年の開講はそれぞれ異なる流れで行っています。

また、私が学会やワークショップの参加を通じて見聞きした物事を積極的に取り入れることを心がけています。昨年は3月にベルリンで行われたSTS HubのDiffracting the Criticalで研究発表を行い、回折（diffraction）という現象をどのようにフェミニズム・クィア理論の方法論や教授法として具体的に取り入れることができるかについて議論しました。「回折」概念は、四半世紀以上前にフェミニズム研究者であり科学者でもあるダナ・ハラウェイやカレン・バラッドが差異の生産されるプロセスに敷衍したことで知られていますが、大規模なSTS学会でパネルの半数以上がフェミニズムに関連するという環境は、非常に勇気づけられるものでした。

おかしいと感じた瞬間を逃さずに

学会後にベルリンのクィア・カルチャーの中心部であるクロイツベルクを散策していたところ、ドイツ歴史博物館『啓蒙主義とは何か？』展のポスターを発見しました。近代科学の発展と切り離せない啓蒙主義の歴史の中で、特に着目した展示が〈写真❶〉です。授業でも触れましたが、なぜ右側が空欄になっているのでしょうか？ 左はドイツで初めて医師となった女性の肖像画ですが、右側は西アフリカから奴隷として連行され、のちに医師となった黒人男性を表しています。その人物の名前も肖像も記録に残っていません。これは科学史においてジェンダー・人種・階級・植民地主義が複雑に交錯した事例のひとつです。



John Hunter by John Jackson, after Sir Joshua Reynolds
oil on canvas, 1813, based on a work of 1786
https://www.npg.org.uk/collections/search/portrait/mw03322/John-Hunter

医学博物館や自然史博物館を訪れるのが私個人の趣味でもあるため、ロンドンのハンタリアン博物館（18世紀に描かれたジョン・ハンターの肖像画〈写真❷〉には不思議な箇所が数点ありますが、気づいたでしょうか？）、コペンハーゲンMedicinsk Museionでの企画展、ベルリン・シャリテの医学史博物館で収集した資料や写真なども多く授業で参照しています。私たちが日常で経験する出来事で「何かがおかしい」と感じる瞬間を手放さず、批判的な思考を培う手助けをしたいと日々考えています。

複合的視点で理解を深める

最後になりますが、D&I部門の教育部門はこれまでの3年間で科目数も増え、受講する学生の数も増加しています。とりわけD&I科目を複数受講するケースについても多く耳にしています。脱植民地主義や障害学、ダイバーシティと法、社会正義論など、様々なトピックを扱っていますが、それぞれ独立した課題としてではなく、互いに関連する議論として複合的な視点から理解を深めようとする主体的な学びの姿勢が広がりつつあります。教育部門としては、引き続きこうした学際的な学びを支えながら、学生が多様な視点を行き来しつつ思考を深められる環境を整えていくことが重要であると考えています。

D&I部門　2026年度Sセメスター開講科目

月４	**性の政治Ⅰ**	クィア理論	**浜崎史菜**
火３	**地域文化論**	脱／植民地政治と性政治	**福永玄弥**
火４	（演習）**インターセクショナリティ概論**		**福永玄弥**
水５	**フェミニズム科学論**	ジェンダーと科学	**飯田麻結**
木３	**性と身体Ⅰ**	障害学	**加藤旭人**
金５	**性と身体Ⅱ**	トランスジェンダー・スタディーズ	**山田秀頌**

人文学、社会科学、科学技術論など広範な領域にまたがる多様な講義が前期教養教育に組み込まれ、通年で7コマ開催されています。
https://www.utdandi.org/

UTokyo Brand Studio 実験中!

第2回

法科大学院3年 雨堤若菜

ブランドコミュニケーションという営み

昨年秋より、UTokyo Brand Studio（以下「ブランドスタジオ」）学生スタッフとして活動しています。キックオフから半年弱、ホームカミングデイへの出展や駒場祭取材といった活動と並行して、グラフィックデザイン、コピーライティングなど様々な角度から、プロの講師による研修を受ける機会を頂いています。

中でもブランドコミュニケーション研修では、クリエイティブ・ディレクターの樋口景一さんを講師としてお話を伺いました。

研修の中で挙げられた例で印象に残っているものがあります。樋口さんが九州新幹線全線開通の広告を担当された際のこと。単に「新幹線が開通した」ことをそのまま発信しては、見る人にとって、交通手段が増えた、という情報にしかならない。そこで企画したのが、沿線の九州各地の人々が九州新幹線全線開通を手を振り歓声をあげて迎える様子を車窓から撮影した映像。こうすることで、小さな地域ごとに社会が形成され分立していた九州の統合、ひいては地域社会や人の輪のつながり、という、より普遍的で視聴者にも共有されるストーリーを伝えることができる。他人事ではなく、心を動かすものになる。そんな考え方は私にとって全く初めて触れるもので、感情に寄り添った、それでいて具体と抽象の視点を使い分けるロジカルな思考に、新鮮な驚きと感動を覚えました。

ブランドコミュニケーションという言葉は何やら難しく聞こえますが、それを考えることは、単なる一方的な広報・発信ではなく、なんだか世界の新しい見方を手に入れることのように私には感じられます。世界のあらゆる物事にそれぞれのストーリーがあって、いろいろな人のさまざまな感情を巻き込んで動いている。その一つ一つに丁寧に寄り添い、意味を見出して、言語化し、あるいは視覚的に表現していく。

ブランドスタジオでの活動を通じ、そのような営みに関われるのなら幸せに思います。この大学に集まる多くのストーリーを大切に拾い上げ、届けていけるよう、ブランドスタジオ一同、これからも模索してまいります。

研修の様子。樋口さんは本学教育学部の卒業生で、一般社団法人クリエーティブ教育研究所の代表理事も務めています。

#WeChange Now

第18回 ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

女性教員幹部養成プログラム ネットワーキングイベント開催

2026年2月4日、伊藤国際学術研究センターにて、藤井輝夫総長と各部局の女性教員26名による意見交換会が開催されました。昼食を共にしながら、参加者全員からの1分間スピーチに、藤井総長からのコメントが述べられ、貴重な意見交換の場となりました。

スピーチでは、「配偶者帯同雇用制度を実現してほしい」「祝日に授業があると学童や保育園が閉まっている」など現状で困っていることをテーマにしたものや、「現行の評価基準は男性的な探求型業績に偏りがちだが、教育や実験などの管理には女性が長ける多角的な視点が不可欠」「東京大学が世界トップ大学を目指すには、大学院生が学際的研究を自ら志せる環境づくりが重要だと考える」といった東大を変革するための提言、さらには、「多様な価値観を尊重し合いながら相互理解を深め、専門知をもって持続的に社会に貢献するリーダーシップを涵養する学びの推進をしていきたい」など東大の未来へのビジョンが語られました。

最後に、林香里理事・副学長より、参加者への激励の言葉が述べられ締めくくられました。

（特任研究員　小野仁美）

女性教員幹部養成プログラムネットワーキングイベント プログラム（2月4日）

12:00	開会の挨拶（藤井輝夫総長）
12:03	参加者のスピーチおよび藤井総長からのコメント
12:50	閉会の挨拶（林香里理事・副学長）

https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/

ワタシのオシゴト 第238回

RELAY COLUMN

地震研究所 庶務チーム 砂川実緒里

地震研創立100周年! 記念すべき年に

地震研マスコット「震研亀」とともに

昨年4月、地震研に異動してもうすぐ1年。人事給与、教務、スポーツ庁への研修出向を経て、現在は「地震研の庶務業務」がワタシのオシゴトです。

具体的には、就労管理、兼業、健康診断、各種照会、行事対応等を担当しており、定型業務もありつつ、新しい学びや刺激が多くあります。

今年度は特に、地震研究所創立100周年記念事業の対応があり、記念すべき節目の年に地震研の一員として携われたことがとても感慨深かったです。『学内広報』No.1601では、100周年記念式典・講演会を特集していただいておりますので、ぜひご覧ください！

異動初年度のこの1年は、周りの方にたくさん助けていただきました。今後は恩返しできるよう、より広い視野を持ったタフな職員に成長していきたいです。

オシゴト以外も少し。バスケットボール（Bリーグ観戦、学生時代の仲間とプレーも！）や、美術館巡り、美味しいものが大好きです。いつまでも趣味を楽しめるよう、健康に気を付けていきたいと思います。

最近食べて一番おいしかったラーメン

得意ワザ：こつこつ継続（日記は20年以上継続！）
自分の性格：てきぱき、マイペース
次回執筆者のご指名：藤森公介さん
次回執筆者との関係：同期のお兄さん
次回執筆者の紹介：業務改革マン！祝・総長賞！！

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FS Field Study レポート!

第42回

文科一類2年 宇城謙人

「見えない」声に向き合い　伝える

FS珠洲市チームのミッションは「子どもたちが思い描く『珠洲のみらい』を表現しよう」。人口減少・過疎化が全国に先立ち進む中、2024年に能登半島地震、奥能登豪雨の被害を受けた珠洲市に生きる高校生が、地域や自らにどのような将来像を思い描いているのかを探り、地域の未来シナリオの設計に役立てようというものだ。

FSとして2回現地を訪問して行った高校生へのヒアリング――と一口に言っても簡単なものではなかった。大人の持つ言葉の重さゆえに、高校生が大人と会話する中で口をつぐんだり、通り一遍な受け答えになってしまう場面に遭遇した。「珠洲の魅力とは？」という問いにも、意外に詰まってしまう。子どもたちが本当に「思い描く未来」とは？生の声を聞く難しさ、そしてその重要性にハッとさせられた。チームでなんとか良い方法はないか検討し、時には高校生の部活動に混ぜてもらって（時にはキャッチボールもしながら！）ひたすら「普通の会話」をすることを繰り返し、そこから見える高校生の本音を探った。

展覧会での様子

録音で集めた声はそのまま文字に起こし、1月17、18日の両日、SHIBUYA SCRAMBLE SQUAREの15階にあるSHIBUYA QWSでの展覧会の開催を目指した。どうすれば能登半島の先端に生きる高校生の声をリアリティを持った声として来場者に届けられるか、チームで試行錯誤。文字起こししたものをポスターにするだけでなく、動画作品も作成した。また、活動内外で、時にはひょんなことから知り合った珠洲出身の方にお声かけして、それぞれが珠洲に対して感じてきたことを語ってもらう3件のトークセッションを設計した。

当日は2日間合わせて72名の方にご来場いただいた。目標としていた100名には及ばなかったが、2時間を超えて滞在いただく来場者が多くを占めたほか、来場者同士の交流が活発だった印象だ。珠洲の高校生の声をきっかけに来場者に何かのヒントが与えられたのであれば、感無量だと感じている。ご協力いただいた珠洲市役所、SHIBUYA QWS、大学の皆さん、そしてチームメンバーの皆さんには感謝しかない。

●メンバーはほかに鈴木律紡（文学部3年）、廣田彩咲（教養学部4年）

インタープリターズ・バイブル 第223回

総合文化研究科 客員教授
科学技術コミュニケーション部門
小松美彦

シラカシ

30年ほど前のことである。来宅した旧友と散歩に出かけた。道すがら、ある場所のことが気になり、久しぶりに足を運んでみた。

それは、木が鬱蒼と茂った、幅1㍍半、長さ100㍍たらずの小道である。農家が屋敷森の一部を区に貸与して「区民の森」となり、そのために敷かれたものである。ただし、当時は両端が藪に覆われ、小道があることすら気づかれにくい小道であった。

蝉時雨に打たれながら旧友とそこへ入っていくと、ふと懐かしい匂いが鼻をついた。私は、やにわに「クワガタの匂いだ」と叫び、脇の大木に目を遣った。その幹には、「シラカシ」と書かれた白い鉄板がぶら下がっており、気配につられて私はそれをめくってみた。すると、クワガタが1匹現れたのである。しかも、近所では初見のオオクワガタである。小ぶりだが、オスのオオクワガタが樹液を吸っていたのである。

それからそこは、私と子供の秘密の場所となった。子供には、クワガタの匂いならぬ樹液の匂いを覚えさせ、集う昆虫を観察させた。時には家に持ち帰ってスケッチさせ、シラカシへと戻した。そして、その根が張り出し、小道が上下にうねっている様も確認させた。日々、どんな昆虫と出会えるかが楽しみだったが、一番の気がかりは、その場所が皆に知られ、虫たちが連れ去られることであった。

しかし、その心配は、何年かで無用になった。シラカシはやはりそびえていたが、虫たちが来なくなったのである。小道が舗装されたためである。シラカシの背後には「区民の森」が広がっているのに、わずか幅1㍍半の小道を簡易舗装しただけで、樹液が涸れてしまったのである。

オオクワガタもカナブンもカブトムシも、いなくなったことによって、いたことを知らせた。シラカシは、虫たちが来なくなったことによって、樹液が涸れたことを知らせた。そして、樹液の枯渇は、小道が舗装されたことの複雑な意味を知らせたのである。

簡易舗装のアスファルトが覆ったのは、小道だけではなく、自然とのコミュニケーションを可能にする私たちの感性でもあるだろう。ならば、歴史とのコミュニケーションをもたらす感性も覆ってはなるまい。

シラカシの樹液がそうであったように、例えば自由も民主主義も一度失われたなら、戻ってこない可能性のほうが高い。何気ないことの絶大な存在意義は、ともすると、不在となってはじめて覚知されるのである。

イ・ア・ラ

科学技術インタープリター養成プログラム

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第77回

ディベロップメントオフィス
アソシエイトディレクター
山田朋子

支援が育む学生の挑戦

「ステューデントサポーターズクラブ（SSC）奨学金」は、返還不要の給付型奨学金として、2022年に創設され、今年度で4年目を迎えました。これまでに127名の修士学生の学びを支えてまいりました。本奨学金の大きな特長は、学生が研究成果を自ら発表し、日頃支えてくださっている寄付者の皆様から直接ご感想やアドバイスをいただける機会が設けられている点にあります。

2026年2月に開催された2024年度採用学生の最終成果報告会では、寄付者の皆様に加え、今回初めてSSC奨学金の修了生も参加し、世代を越えた交流の場となりました。当日は、現役奨学生が6名ずつの5グループに分かれ、順番に寄付者の皆様のテーブルを回りながら、事前に作成した報告書冊子をご覧いただき、研究成果について発表いたしました。経済的な不安が和らいだことで研究に専念できたこと、新たなテーマに挑戦できたことなど、支援がもたらした具体的な変化が、学生自らの言葉で語られ、会場は温かな雰囲気に包まれました。

また、修了生からは、在学中に受けた2年間の支援が現在の進路につながっているというお話もあり、支援が一過性のものではなく、未来へと受け継がれていくつながりであることを実感するひとときとなりました。

奨学金は、寄付募集、選考、資金管理、学生支援など、多くの部署の連携によって支えられています。支援する人、支えられる人、そしてそれをつなぐ人。それぞれの思いが重なり合い、本学の寄付文化はゆっくりと着実に育まれています。

報告会は、その協働の成果が学生の成長というかたちで結実していることを学内で共有する機会でもあります。これからも将来に繋がる交流の場となるような報告会を企画したいと思います。

今後も学内外の皆様とともに、学生一人ひとりの挑戦に寄り添い、その歩みをあたたかく支えてまいります。

SSC奨学金について（東大基金）

東京大学基金　https://utf.u-tokyo.ac.jp/

トピックス

全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles）に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
2月6日	産学協創推進本部	産学協創推進本部と（公財）Soilが2025年度ワークショップを開催
2月9日	コミュニケーション戦略本部	プロセス検証委員会の設置について
2月10日	本部協創課	日立東大ラボの取組が、第8回日本オープンイノベーション大賞を受賞
2月10日	広報室	4歳でも親に勝てる『スイカゲーム』で家族団欒のひとときを＝程涛｜ウェブメディアで培った極意が女性向けゲームに結実＝中島瑞木｜中山未来ファクトリープロジェクトとは？｜東大生が開発したゲームたち｜南極・昭和基地から帰ってきた萩原式電磁地震計／広報誌『淡青』51号
2月13日	コミュニケーション戦略本部	本学元教員の起訴を受けて（総長メッセージ）
2月16日	リサーチ・アドミニストレーター推進室	‘静かな’ポスター大会「東大100人論文」を開催
2月18日	工学系研究科・工学部	東京大学がJTBと産官学連携で次世代IT人材育成プログラム始動
2月18日	産学協創推進本部	「2025年度アジア・アフリカ起業ワークショップ」を開催
2月19日	本部国際戦略課	資本主義を問い直す　東京フォーラム2025が開催
2月19日	本部コミュニケーション戦略課	東京大学が保管している沖縄県由来の人骨について（報告）
2月25日	本部渉外課	新菱冷熱工業株式会社とネーミングプランの協定を締結　駒場キャンパス第2体育館アリーナの愛称を「SHINRYO Arena」に決定
2月26日	国際教育推進課GLP担当	グローバルリーダー育成プログラムGLP-GEfILの第9回修了式を開催
2月27日	本部博物館事業課	IMT学生ボランティア募集
3月2日	新世代感染症センター	NHK「3か月でマスターする人体７」に河岡義裕機構長が出演
3月3日	人文社会系研究科・文学部	大江健三郎氏未発表小説、発見
3月3日	本部入試課	令和8年度前期日程試験及び外国学校卒業学生特別選考合格者発表（予告）
3月9日	コミュニケーション戦略本部	お姫様のチャーミングな門、修理中（赤門 Vol.1）

CLOSE UP　GLP-GEfILとしては最後の修了式を開催

（国際教育推進課GLP担当）

式典後には懇親会が開かれ、津田敦理事・副学長より乾杯の挨拶が、藤井輝夫総長からは修了生の活躍を願うメッセージが述べられました。初代GLP推進室長の吉見俊哉名誉教授のビデオメッセージが上映され、GEfIL ALUMNI GROUP高田亨太会長からも祝辞が述べられました。44名の修了生の皆さん、おめでとうございます。

後期課程学部学生を対象とする東京大学グローバルリーダー育成プログラム（GLP-GEfIL）は、1月30日、第9回修了式を開催し、44名の修了生を送り出しました。これでGLP-GEfILの累計修了生は426名となりました。

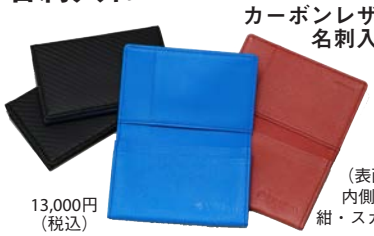
式は実施委員長の福士謙介教授の挨拶で開会。副学長・グローバル教育センター長の矢口祐人教授より、修了生一人ひとりに総長名の修了証が授与され、式辞が述べられました。続いて、林香里理事・副学長から祝辞をいただきました。GLP-GEfILとして最後の修了式であることから、前GLP推進室長の藤原帰一名誉教授を迎え、「脱グローバル化時代のグローバルリーダー」をテーマに基調講演をいただきました。さらに、プログラムをご支援いただいている8つの企業・団体から12名の皆様にご臨席いただき、代表して大塚製薬の金子和裕様より祝辞を賜りました。修了生代表の答辞は経済学部の中村嘉伸さんが務め、プログラムを通じて学んだ「未知への挑戦」「他者への共感」「目標へのコミットメント」「限界への挑戦」というグローバルリーダーに必要な資質について力強く語りました。

修了生、寄附企業・財団様、本学関係者に加え、プログラム開始以来関わってきた教職員やALUMNI GROUPメンバーなど、100名を超える参加者が集まりました。 GLP-GEfILの精神と成果は、グローバル教育センターにて展開されるグローバルリーダー育成プログラム-I（GLP-I）へと引き継がれます。

UTokyo　新年度を、軽やかにスタートする名刺入れ

UTCCからのお知らせ

出会いが増える春。名刺を交わす機会も多くなるこの季節に、名刺入れを新しくしてみませんか？ 航空機やスポーツ分野にも用いられる炭素繊維（カーボンファイバー）を織り込んだハイブリッドレザーを、表面に使用した名刺入れです。軽くて丈夫なつくりで、ビジネスシーンにも最適。カラーは4色展開で内側には牛革を使用。ご自身用はもちろん、ご昇進や異動のお祝いなどのギフトにもおすすめの逸品です。（田）



カーボンレザー名刺入れ

13,000円（税込）

（表面：黒／内側：黒・赤・紺・スカイブルー）

→オンラインストア

CLOSE UP 日立東大ラボが日本オープンイノベーション大賞を受賞 （本部協創課）

表彰式に臨んだ日立東大ラボ長の出口敦先生（右から2番目）、吉村忍先生（中央）ほか。

日立東大ラボの取り組みが、内閣府等が主催する「第8回日本オープンイノベーション大賞」における経済団体連合会会長賞を受賞し、2月9日に虎ノ門ヒルズフォーラムで表彰式が行われました。2016年に東京大学の産学協創活動の第1号案件として発足したのが日立東大ラボです。これまで、企業と大学が組織対組織で取り組む新しい形のビジョン共有型産学協創モデルを提唱し、電力などのエネルギーセクター、化学、鉄鋼、自動車といった産業セクター、データセンターの拡大に関わる情報通信セクター、卸小売をはじめとする業務セクター、カーボンニュートラルに向けたファイナンスを形成する金融セクター、地域を運営する地方自治体など、10を超えるセクターと議論を重ね、複雑なエネルギー分野の課題の理解と社会に及ぼす影響を分析してきました。審査員からは「エネルギー領域でのSociety 5.0実現のためのビジョン創生という、将来の成長技術開発に必要なテーマ設定で、社会的ニーズが非常に高い」との評価をいただいての受賞でした。

CLOSE UP ‘静かな’ポスター大会「東大100人論文」を開催 （リサーチ・アドミニストレーター推進室）

自然科学系では一般的ですが、人文・社会科学系の一部の分野では馴染みがないポスター大会。参加者は思い思いにポスターに向き合い、付箋でコメントを寄せました。

1月29日～30日、「東大100人論文～2分の1の魔法をかけよう」を本郷の総合図書館ライブラリープラザで開催しました。分野や肩書を不問とし、多様な分野の研究者・関係者が一堂に会する「場」の創出を目的としたポスター大会です。堅苦しい作法はなく、3つのメッセージ（私の研究の「問い」、なぜこの問いが重要か、これを読んでいるあなたに問いかけたいこと）を表明するだけで参加OK。直接議論するのではなく、付箋にコメントを書くことで参加する形式でした。分野の専門家が集まる場も重要ですが、他の分野の価値観にふれ、自身の研究を俯瞰的に眺めたいときにそっと寄り添う場も重要なはず。戦略的に異分野融合研究を推進するプログラムの反対側で、新しい研究の仲間探しの場として、煮詰まったときのつながり先として、専門外の方にも自分の研究を届ける「伝わる」表現の練習の場としてなど、活用の広がりが感じられる機会となりました。

CLOSE UP 2025年度アジア・アフリカ起業ワークショップを開催 （産学協創推進本部）

2月8日は降雪に見舞われましたが、多様な学生が参加し活発な議論が行われました。

2月8日～9日、昨年度に続いて、エマージングマーケット（新興市場）における起業に関心を持つ学生を対象としたワークショップを、本郷キャンパスにて開催しました（産学協創推進本部と東大IPCの共催）。当日は、ナイジェリアやインドでベンチャーキャピタリストとして活躍している2人の卒業生（Verod-Kepple Africa Ventures・Partner 品田諭志氏、MUFGガネーシャファンド・Director 吉田健太氏）を講師としてお招きし、新興市場で起業する意義や、アフリカとインドのスタートアップ・エコシステムの特徴、起業・投資において重視される視点などについて、英語による講義やパネルディスカッションを行いました。続いて、ケーススタディ形式により新興市場における投資事業を疑似体験し、当該ケースの当事者であるナイジェリアの起業家（Autochek Africa・CEO Etop Ikpe氏）から、起業経験に基づく実践的な示唆をいただきました。

CLOSE UP 大江健三郎氏の未発表小説を2編を発見 （人文社会系研究科・文学部）

大江健三郎「暗い部屋からの旅行」（1955年）©大江健三郎著作権継承者

人文社会系研究科・文学部は、3月2日に記者会見を行い、大江健三郎文庫に寄託された資料から、本学出身の作家大江健三郎氏（1935-2023年）による未発表小説2篇（「暗い部屋からの旅行」、「旅への試み」）が確認されたと発表しました。「暗い部屋からの旅行」（1955年執筆、原稿用紙82枚）は現存する大江氏の小説としては最も古い作品であり、「旅への試み」（1957年執筆、原稿用紙42枚）は文芸誌デビューの「死者の奢り」「他人の足」とほぼ同時期に執筆された作品です。ともに大江文学の初期作品を理解するうえで貴重な資料であり、今後の研究の進展が期待されます。両作品の自筆原稿のデジタル画像は、3月6日より大江健三郎文庫にて研究者を対象にして閲覧が可能になっているほか、両作品の全文は同日刊行の講談社の文芸誌『群像』（2026年4月号）に掲載されています。

令和8年度 学内広報 配布スケジュール

1605号	4月30日	1606号	5月29日	1607号	6月30日	1608号	7月31日	1609号	8月28日	1610号	9月30日
1611号	10月30日	1612号	11月30日	1613号	12月24日	1614号	1月29日	1615号	2月26日	1616号	3月31日

七徳堂鬼瓦

大学運営にどう関わるかを考える

大学では「大学の自治」のもとで教員が主導する運営が行われてきたが、法人化以降、意思決定の仕組みは変化し、大学運営はよりトップダウン型の性格を強めてきた。この変化は迅速な判断を可能にする一方で、人的資源の配置という課題を改めて浮かび上がらせている。トップダウン型の運営は適材適所を前提とするが、現実には教員が本来担う必要のない実務的業務への広範な動員が継続しており、適材適所をどのように制度として担保するかが問われている。

教員の実務的業務への関与は、全学や部局の管理運営、入試業務、各種委員会業務など大学運営の多くの場面で常態化している。専門性を十分に活かせない業務への投入は、研究や教育の時間を静かに、しかし確実に圧迫し、授業改善や研究構想に充てられるはずの時間を少しずつ削っていく。こうした影響は短期的には目立たないものの、長期的には研究成果や教育の質の差として現れるだろう。これらの負担は予算上では可視化されず、「見えないコスト」として蓄積している。これは個々の業務負担の問題ではなく、大学という組織が専門性をどのように活かすかという構造的な問いにほかならない。他方、分業が進むほど、教育・研究の実態を最も理解している教員の制度設計やルール形成への関与は制限されることになる。教員の役割は専門でない業務の多くから切り離されるべきである一方、大学の使命に関わる意思形成には多くの教員の英知の結集が不可欠であろう。

近年、本学の在り方に対する社会的関心はこれまで以上に高まっており、管理強化への圧力はさらに増すだろう。ここでは、人的資源の配置関与・裁量の範囲と責任の所在を丁寧に設計することが重要であって、統制の強化だけでは大学の持続的発展は期待できない。現場の納得と実感を得られる形で専門性をどう活かし、誰がどの場面でどの業務に関わるのかを丁寧に考え続けることが、大学の持続的な発展と信頼を支える基盤となるのではないだろうか。

浅井 潔
（新領域創成科学研究科）

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部コミュニケーション戦略課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp